

秀歌三十首十今年の収穫

鈴木陽美

盛り上がる背の筋肉の、締めりある腰のしな
 りの虎の全身 十月号・梅原ひろみ
 湾曲した右肩上がりのメモの文字 七年のち
 も君を残せる 清水あかね
 祖母織りし生成りシルクの手触りの山芍薬は
 行く春に咲く 深澤 一女
 酔ひつづれ時計盗られし遠き日の夫を語れる
 ロレックスの箱 十一月号・北澤 道子
 観るはずの映画の時間ゆかせつつ真夏の鍋に
 手羽を沈めて 松本 実穂
 あ、虹と東空をひとり指させばドミノのごと
 く次つきに見つ 十二月号・久保富紀子
 初めての道に踵を二度返しグーグルマップの
 ペグマン我は 大谷ゆかり
 そうですすねそうですよねと頷いて白さるすべ
 り花をこぼせり 水口奈津子

韓国から人來ず淋しき朝市の石蕁、海髪海苔、
 鹿尾菜に干物 一月号・鷺沼あかね
 風風を天に押し上げ深川の汗を惜しまぬ人ば
 かりなり 花 美月
 關伽の語源問へば仏は教へ給ふ水族館のアク
 アのことぢや 二月号・犬飼 亮介
 はしはしと奄美の森の北風に乗る赤きハゼの
 葉早馬となりて 浜田ゆり子
 引き寄せて黙って私を抱きいし死の十日前霜
 月の夜 片山 紫
 病院前、団地入口、馬洗、文化センター 雲
 が出て来た 三月号・鈴木 勉
 しろくまのピースのような瞳してもたれる吾
 子の爪を切りたり 中川 弘子
 手帳には書かれていない予定にて本日われに
 風邪の症状 武藤 義哉

ふつくりと雉鳩の声するわが内耳淋しいのか
 な人恋しいのかな 鈴木香代子
 一夜にて生えし織き根しると抜きつつ朝
 のからだを起す 四月号・福崎 享子
 新聞紙ではおかむりする白菜ののつべらぼう
 の顔つづく畑 大澤 澄代
 「御破算で願ひましては」二の指でつついと
 払ふ訳にはいかず 北川 秀子
 嘘だらけの世に真実を深海松のディープフェ
 イクで拵えている 五月号・加古 陽
 花魁の櫛にも似たる蠟梅の花がとろりと溶け
 てゆく夜 由田 欣一
 処方された眼剤の名は「トラゾドン」はるか
 ジュラ紀の足音聞こえる 六月号・遠藤 彰
 海風に吹かれしよっぱい唇をマスクに収めて